Travel of Lial～炎の聖剣

結城遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｒａｖｅｌ　ｏｆ　Ｌｉａｌ～炎の聖剣

【Ｎコード】
Ｎ０１３５Ｅ

【作者名】
結城遼

【あらすじ】
主人公のリアルは、いろんな所を旅している旅人。ふと立ち寄ったルーフィンド村で、何故か命を狙われることに・・！？そこで出会った謎の少女。彼女は一体・・・。冒険・友情・ファンタジーをテーマに書いた小説、是非ご堪能あれ！

【人物紹介&プロローグ】

・主な登場人物紹介・

『リアル』（主人公）

［年齢・性別］・・・15歳／男
［身長・体重］・・・155センチ／48キロ
［属性］・・・・・・・・炎（えん）
［髪・瞳］・・・・・・・・茶色／青色
［性格］・・・・・・・・元気いっぱいがとり得。純粋で実年齢より幼く見える。釣りが得意。

『フィン』

［年齢・性別］・・・16歳／女
［身長・体重］・・・167センチ／56キロ
［属性］・・・・・・・・水（すい）
［髪・瞳］・・・・・・・・金色／緑色
［性格］・・・・・・・・普段は優しい女の子。シヴィルの妹で、シヴィルへの態度が酷い・・？

『シヴィル』

［年齢・性別］・・・18歳／男
［身長・体重］・・・178センチ／64キロ

［属性］・・・・・・・・・風（ふう）
［髪・瞳］・・・・・・・・・銀色／橙色
［性格］・・・・・・・・・フィンの兄でヘタレな感じだが、兄気肌で結構頼りになる。すぐに周りと打ち解けられる、男前さん。

『ケイリ』

［年齢・性別］・・・・１８歳／男
［身長・体重］・・・・１７９センチ／６０キロ
［属性］・・・・・・・・・光（こう）
［髪・瞳］・・・・・・・・・青緑色／緑青色＋少し紫
［性格］・・・・・・・・・フィンとシヴィルの幼馴染みで、二人の喧嘩を止めるのは彼の役目。歳の割りに冷静沈着で、眉目秀麗。過去に訳有り。

『ティモシー』

［年齢・性別］・・・・１０歳／女
［身長・体重］・・・・１４２センチ／３８キロ
［属性］・・・・・・・・・氷（ひょう）
［髪・瞳］・・・・・・・・・桃色＋赤紫／赤紫＋紫
［性格］・・・・・・・・・リアルとケイリに懐いている。元気いっぱいの女の子！天然（？）だが、たまの一言がきつい。

『まりも』（以下まりもについて簡潔に箇条書き）

・出生地多分湖
・年齢性別不詳
・体長約２０センチ
・言葉を喋る未知の生物
・何かとリアルのいる場所に出現する

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

～プロローグ～

ここは惑星ネオン。約５億人ほどの人間が住んでいる。

ネオンに住む人間には、それぞれ属性があり、不思議な力を持っている。

属性には７つある。

【炎（えん）】・【水（すい）】・【風（ふう）】・【光（こう）】・【雷（らい）】・【地（ち）】・【氷（ひょう）】だ。

ここで、それぞれの属性の特性を簡単に説明しておこう。

１つ目は【炎（えん）】。炎はとても珍しい属性で、この属性の人間はネ

オンに住んでいる人間の約一割にも満たない。炎・火を自由自在に扱える。

２つ目は【水(すい)】。この属性は一般的な属性で、一番多い属性だ。水を自由自在に操る。

３つ目は【風(ふう)】。この属性も水と同様、一般的な属性で一番多い属性。風を自由自在に操る。

４つ目は【光(こう)】。この属性の人間は落ち着いた感じの人間が多い。癒しの力を持つ。光を扱う。

５つ目は【雷(らい)】。この属性には多少気性の荒い人が多い。攻撃的な人間が多い。雷を自由自在に扱う。

６つ目は【地(ち)】。この属性には暖かい感じの人間が多い。自然をこよなく愛すものが多い。大地を操る。

そして最後７つ目は【氷(ひょう)】。この属性も攻撃的な人間が多い。二面性があり、謎めいた人間が多い。氷を操る。

以上が簡単に説明したものだ。

しかし、この能力は初めから備わっている訳ではない。
自分自身がその持っている能力に気づき、自在に操れるようにならなければならない。
だから、気づかなかったものは生涯その能力は使えずに終わる。

この小説は、主人公のリアルが旅人としていろんなところを回り、
いろんな人々と出会う。
そしていろんな事件に巻き込まれてしまう、冒険ファンタジー小説！

【人物紹介&プロローグ】（後書き）

連載開始しました！

まだプロローグですが、リアルたちと一緒に読んでくださってる方も冒険してくれたらなと思います！

Ｅｐｉｓｏｄｅ１＊旅人・リアル

「ん～、気持ちぃ～！」

俺の名前はリアル、１５歳。ドルフィー村って所で生まれたんだ。ドルフィー村は、凄く小さな村だけど自然がいっぱいですっごいいい所なんだ。

俺は小さい頃から好奇心旺盛で、冒険とかが大好きだったんだ。それで、１２歳に旅に出ることを決意した俺は、両親にそのことを話した。初めは反対されると思ってたんだけど、意外にすんなりと許可してくれた。
反対に、『自分のやりたいことは好きにやりなさい。でも、あんまりハメを外し過ぎないようにね』って。

だから、今俺はこうしていろんな所を旅して回っている。

「え～っと、ここから一番近い村はっと・・・ルーフィンド村かぁ・・・」

俺は今いる所から、一番近いルーフィンド村で何日か過ごすことにした。

――――グウゥゥゥ・・・・・

「・・・まぁ。その前に腹ごしらえでもするか！」

と言う訳で俺は近くにあった川で、魚を釣ることにした。俺釣り、得意なんだよな！

で、俺は腰に吊り下げてあった袋から道具を取り出し、釣りの準備をして魚が引っ掛かるまで木陰で休むことにした。

そしてしばらくすると、釣り糸がぐいっと引いた。

「よしっ！掛かった！」

俺は素早く釣り糸を引いた、が・・・。

「やぁ、少年！」

釣れたのは魚ではなく・・・、変な物体だった。

何か体長が２０センチくらいで、頭がツンツンで・・緑・・・・・みどり・・色・・。

――――変だ・・・・！明らかに変だ・・・・っ！！

俺は思った。そして俺は釣れた物体に向かって言い放った。

「・・・アンタ誰だよ！！」

と・・・・。しかし、いつの間にか釣れた謎の物体は忽然と消えていた。俺は首を傾げたが、対して気にすることもなかった。

まぁ、そんなこんなでその後からバンバンと大量に魚が釣れたから腹はいっぱいだった。

これはあの変な物体を釣ったからかな？まりもみたいだったから、あの変な物体の名前は《まりも》にしよう、よし決まり！

微妙にまりもに感謝した俺だった。

そして、腹もいっぱいになった所で俺はルーフィンド村を目指して出発した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１＊旅人・リアル（後書き）

リアルの旅がいよいよ始まりましたね！！

頑張って書かねばなりません。

文章がおかしいのとかは、ご了承下さい・・・。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２＊ルーフィンド村

俺はあれから一時間ほど歩いた。

見えてきたのは、賑やかで水の綺麗な村だった。ドルフィー村よりも大きな村だ。

ふと橋の上で立ち止まって村を眺めた。

「ここが、ルーフィンド村か・・・。綺麗な村だな」

暫く立ち止まって眺めていると、後ろからいきなり声がした。

「ねぇ、あなた旅人？」

「わぁっ！！」

俺はビックリして思わず叫んで後ろを振り返った。

後ろに立っていたのは、俺よりも１０センチ近くも背が高くて、髪の毛は肩に掛かるか掛からないかくらいの長さの女の子だった。

―――１０センチ近くも身長差があるのショックなんだけど・・・・・。

「ねぇ、聞いてる？」

女の子は俺が返答しないからか、眉を顰めて言った。

「あ・・・うん、いろんな所を旅して回ってるんだ。それで、さっきここに着いたんだけど」
「そうなの。あたしの名前はフィン！このルーフィンド村に住んでるの、宜しくね！」
「うん、こちらこそよろしく！俺はリアルって言うんだ！」
そう言って、俺とフィンは笑った。
「リアル、いい名前だね」
「へへっ、ありがとう！」
俺はフィンにそう言われ、恥ずかしくて照れ笑いをした。
「何日かはここにいるんでしょう？」
「うんまぁ、長くて一週間はいるかな・・・？」
「じゃあ、家にくる？」
「えっ？」
「実は私の家、宿屋なの！さっき着いたってことは、まだ宿とか決まってなかったんでしょう？」
「うん、まだだけど・・・。でも・・、いいの？」
俺は不安げな目で、フィンを見上げた。身長差があるんだから見上げるのは仕方ない・・・。
「え・・えぇ、！家は宿屋なのよ！旅人を泊めるのが、私の仕事！（可愛い～！一家に一人って感じね！）」
「ありがとう、フィン！」
俺はフィンにお礼を言った。でも何かフィンは自分の世界へ行っ

ているのか、さっきから俺を横目で見ながらキャーキャー言ってる。何でかなぁ、心配だなぁ・・・。

「フィ・・フィン・・？」
「え？あぁ、じゃあ行こうか！」
「あ、うん」

こうして俺は、フィンのお陰で宿を探す手間が省けた。そして、フィンについて行こうと一歩足を踏み出した時――――。

『――――――――』
「っ！？」

俺は、背後から女の子の声が聞こえた気がして、それと同時に激しい寒気に襲われた。そして、ゆっくりと後ろを振り返った。

しかし、後ろには・・・何もなかった・・・・。

「リアル～？何してるの？早くきなよ！」
「あ、ごめん！今行くよ！」

俺は今の事を、ただの気のせいだと思ってフィンの元へと走って行った。

これから自分の身に何が起きるかも分からずに・・・・・・・・。

『――――――やっと見つけた、あの聖剣の主を――――――』

Ｅｐｉｓｏｄｅ２＊ルーフィンド村（後書き）

フィンが出てきました。
リアル、凄い身長にコンプレックス持ってるみたいですね（苦笑）

Ｅｐｉｓｏｄｅ３＊宿屋の兄妹

「ここがあたしの家の宿よ！」
「わぁ～、すごいおっきぃなぁ～！」

俺は、フィンに連れられて宿に着いた。そして初めにビックリしたのは宿の大きさだ。他の宿よりも遙かに大きい。

「ふふっ、大きいでしょ？ここはこの村で一番大きい宿屋なのよ！」
「へぇ～、すごいな・・・。そんなとこに泊めさせてもらえるんだ」
「さぁ、入りましょう！」

俺は、フィンに手を引っ張られながら中に入っていった。

「遅かったなフィン」

中に入ると、銀髪の男の人が出てきた。俺よりも２０センチ近くも背が高い・・・。
あ～、ホントなんかショックだよぉ～・・・と嘆いていた、その時――――。

「まぁ、背が低くてもいいじゃないか！」

・・・ん？この声はどこかで・・・。

「やぁ、少年！」
「！？」

やっぱり。そこにいたのは、この村に来る前に釣り上げたまりもだ

った。

――つかなんでここにいんだよっ！！！

「ん？どうした少年？」

「お前のせいだあぁぁぁーーーっ！！！！」

「ぎゃあぁぁぁーーーっ！！！！！」

俺は爆発して、まりもを殴り飛ばしてしまった。そしてまりもは、空の果てへと飛んでいってしまった。

・・・・なんか悪いことしたかな・・？少し反省。

「リアル？何してんの？」

「えっ？いやっ・・・あの・・なんでもないよ！はははっ・・・・はは

はっ・・・・」

俺は何とかフィンを誤魔化した。

――・・・・ってか今の誤魔化せたのか！？

「リアル、紹介するわ。こっちは、あたしの兄さんよ！兄さん、この子は旅人のリアル」

「よぉ、リアル！俺はフィンの兄で、シヴィルだ。よろしくな！」

「うん！俺は旅人のリアル！よろしく！」

俺はシヴィルと握手した。シヴィルは凄い気さくな感じで、話しやすい雰囲気だった。

――シヴィル・・・やっぱり大きいな・・・。

「ところでリアル・・・」
「ん、何？」
「お前大丈夫か？」
「えっ？何が？」

俺はシヴィルの言っている意味が分からず、頭に？を飛ばしながら首を傾げた。

「だからっ・・、フィンに何もされてないかって聞いて・・・・・・・ぐおっ！！」
「シ・・シヴィル！？」
「ちょっと兄さん。何変な事言ってんの・・・・・？」
「フィ・・フィン！落ち着け！！俺は何も言ってな・・っ！！」
「問答無用！！」

そう言って、フィンの膝蹴りがシヴィルの腹に命中・・・。

「いってえぇぇぇぇっ！！！お前！思いっきりけんなよっ！！！」
「ふんっ、自業自得よ！」

シヴィル、大丈夫かな・・・。今思い切りフィンの蹴り食らってたけど・・・。
　こう見ると、フィンがお姉さんでシヴィルが弟に見えるよ。

「もうっ！リアル、兄さんなんか頬って置いて、行きましょう！部屋を案内するわ」
「えっ・・、あ、うん・・・」

シヴィルごめん！フィンには勝てそうにないよ俺・・・・・。

そして、俺はフィンに部屋まで案内してもらうために、フィンの後ろについて行った。

床に伏せているシヴィルに合掌するのを忘れずに・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その頃のシヴィル――――。

「くそっ・・・、フィンの奴・・・。俺の方が上なのに・・・思いっきり・・・・蹴りやがって・・・ごほっ・・・ケホッ・・・・」

まだ、蹴りを食らった余韻が残っていたのだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３＊宿屋の兄妹（後書き）

おおっと、フィンの兄のシヴィルも出てきました！
断じてヘタレではありません・・！！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ４＊言い伝え《前編》

俺は部屋に案内してもらうためにフィンの後ろについて、廊下を歩いていた。
すると、廊下の隅に硝子の箱で覆われた一つの剣を見つけた。

「ねぇ、フィン・・・」
「何？」
「あの隅にある剣は何なの？」

気になって俺は、フィンに尋ねてみた。

「あぁ、あの剣・・・・。あたしも言い伝えでしか分からないんだけど・・・。まぁ、リアルになら話してもいいかな？」
「？・・・どういうこと？」
「まぁ、焦らないで！それは部屋に着いたら話してあげるから」
「う・・うん・・・」

そして、そこから少し歩いた部屋に俺とフィンは入った。

「さぁ、ここがリアルの泊まる部屋よ。何か欲しいものがあったら、何でも言ってね」
「うん、ありがとう、フィン」

そして、リアルはふと気に掛かったことを聞いた。

「そういえば、フィンとシヴィルの両親はいないの？」

ここまで大きな宿屋でも、両親がいれば必ず会うはずだ。フィンが1人きりでここを営んでいるとも考えにくい。
リアルが聞くと、フィンは少し目を伏せた。

「お母さんはね、今ちょっと体調崩してて入院してるの。お父さんは・・・・三年前に事故で死んだわ」
「あ・・・ごめっ・・・」
「いいのよ！もう三年も前の事だもの。お母さんは元々身体が弱い人だし」
「そ・・・っか・・・。きっと、フィンのお父さんも、フィンとシヴィルのこと見守ってるよ！」
「そうね・・・ありがとう。・・・・でもあたし達なんか、ケイリより大分マシだわ・・」
「えっ？」
「ううん、何でもないわ！」

俺は最後のフィンの言葉は聞こえなかったけど、あまり問いたださなかった。聞いてはいけないような気がしたから・・・。
そして二人は、そのまま部屋の椅子に座った。

「で、リアル。さっきの剣の話聞きたいんだよね？」
「うん」
「じゃあ、今から話すわ」

俺は何故か少し緊張していて、生唾を飲み込んだ。
そして、フィンはゆっくりとその言い伝えを話始めた。

「あたしも、小さい頃にお母さんから聞いただけなんだけど・・・。今から百年くらい前になるのかな？あたしのひいお祖父さんが若かった時にあの剣が造られたの。でもね、あの剣は特殊で、あの剣を

扱えるものはたった一人。『あの剣に選ばれし、炎の属性を持つもの』」
「炎の属性？」
「そう、このネオンに住む人の中でほんの一握りしかいないと言われている、炎を自由自在に扱えるもの」
「でも何で炎の属性だけなの？」
「それは、あの剣自体が炎の属性だからよ。元々あれはひいお祖父さんためにに造られたの」
「ってことはフィンはひいお祖父さんは、珍しい属性の人だったんだ」
「えぇ。ひいお祖父さんは炎の属性だったの。そして、その剣にもしも、炎以外の属性を持ったもの、炎の属性でも選ばれていないものが触れたら・・・」
「触れ・・たら・・・・？」
俺は、恐る恐るフィンに問いかけた。
「それは・・」
「焼き殺されるか、運が良ければ大火傷で済むってとこか？」
「シヴィル！」
フィンが答えようとしたとき、その後ろからシヴィルが答えた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４＊言い伝え《前編》（後書き）

意味不明になってきました・・・！！！
が・・頑張れ私・・！！

シヴィル復活（笑）

Ｅｐｉｓｏｄｅ４＊言い伝え《後編》

「あら兄さん。生きてたの？」
「おいおい、生きてるに決まってるだろーがっ！！」
「あら。あたしはてっきり死んでるのかと思ったけど？」
「何ぃ～！？」
「まぁまぁ！二人とも落ち着いてっ！！」
「そうさ！落ち着かんと話が進まん！」
「！！？」

ん？今のまさかっ！！

「Ｈｅｙ！」

何でまりもが！？何故俺の行く所行く所出てくるんだ！！・・・もういいや。考えるの疲れた。
まりもいても俺には関係ないし・・・・・・ってまりもいねぇっ！！また忽然といなくなってるし！！
俺がそんな事をいろいろと考えて唸っていると、フィンとシヴィルが声を掛けてきた。

「大丈夫か？リアル？」
「具合でも悪いの？」
「えっ？ううん、何でもないよ！！」
「そう、ならよかった。それで、さっきの話の続きなんだけど、まぁ兄さんが言ったようになるのよ。その剣の魔力で」
「炎以外の属性はそれぞれ、『水』『風』『光』『地』『雷』『氷』がある。まぁ、ちなみに言えば俺の属性は『風』だ。もちろん剣は

扱えない。そんで、こいつが・・・」
「『水』よ。あたしもあの剣は扱えない」
「俺たちはあの剣を扱えない。炎の属性じゃないからな。最後にあの剣に触れたのは、俺たちのお祖父さんだ」
「お祖父さんが亡くなってからはもう、あの剣を扱える者がいなくなって・・・。それからあの剣はあのままなの・・・」
「その祖父さんが最期に言っていた言葉が・・・」
「『外から来られし旅人。聖剣の主になるであろう』」
「外から来られし旅人。聖剣の主になるであろう・・・」

声を揃えて言った二人の言葉を、俺はオウム返しに言った。

「そう、そしてあたしたちはその聖剣の主を探す役目があるの」
「そうだ、リアル。お前の属性聞いてなかったよな？お前の属性は何なんだ？」
「えっ・・・・？・・・・・・・・・」
「リアル・・・？どうしたの・・・？属性は・・・・」
「・・・・んない・・」
「何？」
「俺・・・自分の属性・・・知らない・・・」
「えっ・・・？？」

二人は驚いたような顔をした。俺は苦笑いするしかなかった。

「リアル、自分の属性知らないの！？」
「う・・うん」

俺はフィンに言われ、ぎこちなく答えた。

「そうだったのか。じゃあ、ケイリにでも調べてもらうか？」

「ケイリ？」
「えぇ。ケイリはこの村の占い師って感じかな？」
「もしかしたら、リアルが聖剣の主かもしれないしな！」
「そうと決まれば、さっそくケイリの家へ行きましょう！」

こうして、俺とフィンとシヴィルは、そのケイリという人物の家へ行くため、宿を出発した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４＊言い伝え《後編》（後書き）

まとまりなくてすみません・・・！！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ５＊ケイリ《前編》

俺はケイリと言う人物に、自分の属性を何かをみて貰うため、フィンとシヴィルと共にケイリの家までやって来た。二人に、宿のほうは大丈夫なのかと聞くと、自分たちのほかにも働いてくれている人がいるから大丈夫だって。俺が心配でついてきてくれたみたい。

ケイリの家は、村の裏路地の奥の方にあった。占い師というから、すごく大きな家を想像してたけど、意外と普通の家だ。”ケイリ”って一体どんな人なんだろう・・・。

そして、俺達はケイリの家へと入った。正確にはシヴィルが勝手に入って行ったんだけど・・・。

「おーい、ケイリいるかー？」

「ん～・・・。・・・・・・シヴィルか？」

「何だケイリ。寝てたのか？」

「ん、あぁ・・。昨日いろいろとあって、それが朝方まで延びて・・・」

「お前も大変だな、無理すんなよ？」

「わかってる・・」

家の奥から出てきたのは、青い髪に深い緑色の瞳をした中性的な顔立ちの男の人だった。

髪の毛は腰の辺りまで伸びてる。しかも身長はシヴィルと同じくらい・・・。

――この人がケイリか？ていうか俺、今巨人に囲まれてるみたい・・・（泣）

すると、ケイリと思われるその人が、俺に気づいた。

「ん？・・・・この子供は？」

「むっ！子供じゃない！俺は１５だぞ！！」

「えぇっ！？リアルってあたしと一つ違いなの！？あたしてっきり１０歳くらいかと思ってた・・・」

「お・・俺もその位かと・・」

――何で！？俺やっぱりチビだから年下に見られるのかな～。何か空しいぞ・・・。

一人落ち込んでいると、ケイリが俺の前に立った。やっぱりでかい・・・。

「わ・・悪い・・。悪気はなかったんだ・・・」

「別にいいよ、もう慣れてるし」

「俺はケイリだ。一応この村では占い師ってことになってる。占い師は本業ではないが」

「そうなんだ！俺はリアル、旅人なんだ」

俺がそういうと、ケイリが少し微笑んだ。

「それで、ケイリ。いきなりなんだが、リアルの属性を見てやってくれないか？」

「あぁ、別いいが・・。リアルは自分の属性・・・」

「知らないんだよ」

シヴィルが言うと、三人は俺の方向いた。

「うっ・・・なんだよ・・・」
「ふぅ、まぁいい。俺の属性は『光』だ」
「『光』？」

俺はケイリに問いかけた。

――風と水はまぁ分かるけど、光って何が出来るんだ・・・？
・・・もしかして！目から光が出せて、暗闇を自由に歩きまわれるとか！？

「リアル・・・・今お前、有り得ないこと考えてただろ・・」
「えっ・・・！そんなこと・・・・あるかも・・・・・・」
「そんなことあるんかいっ！！」

うわっ！今まりもにツッコまれた・・・。俺もう生きていけない・・・っ！

「光は、光を出すのはもちろん出来る。暗闇の中でも、光を出せば歩き回れる。でも、目からは出せないぞ？」
「（うっ・・ばれてる！？）」
「そのほかには、癒しの力がある。怪我を治したりも出来る。そして、予言。未来を覗くことも出来る」
「へぇ、そうなんだ！すごいんだね！！未来を覗けたら、いろいろと便利で楽なんじゃない？」
「・・・・・・・俺は、未来を覗けなくても・・・・よかった・・・」
「へ？何で？」
「いや・・・なんでもない」

ケイリはそう言って、俺に背を向けた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５＊ケイリ《前編》（後書き）

ケイリ登場！
さてさてどうなるかなぁ～。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５＊ケイリ《中編》

「さぁ、今から占ってみるからリアルはこっちに。シヴィルとフィンはそこで待っててくれ」
「わかった」
「リアル、あたしたちはここで待ってるからね」
「うん」

そして俺は、ケイリに奥の部屋へと通された。
そこはどうやら、普段占いをしている部屋みたいだ。

「リアル、そこの椅子に座ってくれ」
「ここでいいの？」
「あぁ、座ったら目を閉じてリラックスするんだ。頭の中を真っ白に、心を無にするんだ」

俺はケイリに言われたとおりに目を閉じてリラックスした。暫くすると、頭がボーッとしてきた。まるで催眠術にでもかけられてるみたいだ。
それから数分、その状態が続いた。

「リアル、もう目を開けてもいいぞ」

俺はゆっくりと目を開けた。余韻が残っているのか、まだ頭がボーッとする。

「もう占いは終わったの？」
「あぁ、終わったよ」

「それで・・・俺の属性は何だったの？」
一番気になっていることを聞いてみた。
「お前の心底には、炎の気が見えた。リアルの属性は間違いなく『炎』だ。しかし、お前自身も気づいていなかったのと、まだ潜在能力が発揮されていなせいで、その気が消えかかっている」
「消えると・・・」
「その力は消滅し、力は使えなくなる」
「じゃ・・じゃあ、消えないようにするためにはどうすればいいの？」
「今、リアルの未来を少し覗かせてもらった。未来と言っても、2・3日先だ。それを見ると、今日から3日の間に何かの拍子でお前の潜在能力が発揮される。その潜在能力が発揮されれば、その気は消えることはない。まぁ、発揮されるかどうかはリアル次第だが・・・」
俺は黙って、ケイリの話を聞いていた。
「ねぇ、ケイリ。さっき、3日の間に何か・・・って言ってたけど、何があるの・・？」
気になったことを、ケイリに聞いてみた。
「単刀直入に言う。お前はあの炎の剣、聖剣の主だ。あの聖剣の本当の名前は『Ｓａｉｎｔ　Ｆｌａｍｅ　Ｓｗｏｒｄ』。聖なる炎の剣という意味だ」
「聖なる・・炎の剣・・・。・・・・っていうか、その主が俺っ！？」
「そうだ」

―嘘だ、あり得ない。何で俺が聖剣の主なんだ？今まで普通に旅人やってたのに、いきなり聖剣の主ったって！！

「まぁ落ち着け。それで、今日から3日の間に何かって言うのは・・・・」

「言うのは・・・？」

「お前の命が狙われるということだな」

「は・・はぁっ！？何でだよ！！」

「その理由は・・・わからない・・」

ハッキリ言ってショックだった。

俺はただの旅人で、偶然立ち寄ったこのルーフィンド村で、いきなり聖剣の主だって言われて、おまけに誰かに命を狙われてるだって！？冗談じゃないよ！！

俺はどん底に落とされた気分だった。

「そろそろ行くか、シヴィルもフィンも待ってる」

「うん・・・」

そしてケイリに連れられて、フィンたちが待つ場所へと戻った。

「リアル！」

フィンが俺の姿を見て立ち上がった。

「どうだったの？」

「・・・・・・」

「リアル？どうしたんだ？」

二人は俺が喋らないからか、心配している口調だ。でも、俺は喋る気になれなかった。

その時、ケイリが口を開いた。

「ふぅ・・・、俺から話すよ。リアルは、惑星上珍しい炎の属性で、その上あの聖剣の主だった」

「やっぱり、リアルが聖剣の主だったのね！！」

「しかしだ」

「しかし・・・何だ・・？」

Ｅｐｉｓｏｄｅ５＊ケイリ《中編》（後書き）

ついに聖剣の主が明らかに・・・！！！

まぁ、大体皆さんわかってたでしょうかね（苦笑）

ケイリは冷たい人間ではないですよー。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５＊ケイリ《後編》

「しかし、ソレと同時に・・・誰かに命を狙われてる・・・」

ケイリは、さっき俺に言ったことをそのままシヴィルとフィンに告げた。

「うそ・・でしょ・・？」

「いや、間違いない。まだ・・・誰とまでは分からないが・・・」

「・・・ケイリ。それは本当なのか？何かの間違い・・・とかじゃねーのか？」

「・・・残念だが、間違いとかはない。俺が今全部告げたことは、全て真実だ。だが、死ぬと決まったじゃない。どうなるかは、リアルのこれからの行動で大きく変わる」

そして暫く沈黙が続いた。その沈黙を破ったのは、シヴィルだった。

「命を狙われてるのがなんだ！リアル、お前は一人じゃないんだぜ？俺も、フィンも、そしてケイリもいるんだ！」

「そうよ、リアル！あなたに危険が迫ったときは、あたし達が助けるから！」

「シヴィル・・フィン・・」

「あぁ、俺も協力するから。な？リアル、これから外に出るときは、必ず俺かシヴィルかフィンと一緒にいるんだ」

「ケイリ・・・」

三人の言葉を聞いて、俺は少し気が楽になった。

「ありがとう、みんな！そうだよね、今の俺には頼もしい仲間が三人もいるんだ！俺も命を狙われてるんだから、気を引き締めないとね！」

そう言って、俺は三人に向かって笑った。

「やっと笑った！」

「え？」

「リアルは笑ってるほうがいいぜ！」

「そうさ！お主が笑ってないと、登場しにくいだろう」

「にゅっ！？」

今のはまりも！？またいやがった！！

「お前なんでいるんだよ！！」

するとまりもは・・・・・、

「ん～～・・・、気分で？」

――――バキッ

「あ～れ～！」

「一回死ねーーーーーッ！！」

そしてまりもは、空の彼方へと消えた。ふと俺は思った。

「何なんだよあいつは・・・」

と・・・。

「さぁリアル、そろそろ宿に戻りましょう！」
「リアル、ケイリも一緒に来てくれるみたいだぞ」
「ホント！？」
「あぁ、お供させてもらうよ。ここまで来たら最後まで付き合うよ」
「シヴィル、フィン、ケイリ。ありがとう！」

そして、俺は力強い仲間、シヴィル・フィン・ケイリと共に宿へと戻った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５＊ケイリ《後編》（後書き）

はーい！

友情はいいと思いますよ・・！！うん！

Ｅｐｉｓｏｄｅ６＊謎の少女

ケイリに占ってもらってから2日が経った。
俺は宿にタダで泊めてもらっているお礼に庭掃除をしていた。フィンは別にいいと言ってたけど、これくらいしないと悪い気がするし。

「リアル、おはよう」
「あ、ケイリ。おはよう！」

掃除をしていると、宿の中からケイリが出てきた。

「調子はどうだ？剣は使いこなせそうか？」
「うん！全然問題ないよ！」

俺はあれから宿に戻って、剣を授かってからケイリと剣を使う稽古をしていた。
元々運動神経がよかったからなのか、俺はすぐに剣を使いこなせるまでになった。

――まぁ、ケイリの剣の指導が凄く分かりやすくって集中できたってのもあるよな。

ケイリの教え方はホントに分かりやすかった。一度見ただけで、駄目なところを指摘してくれて、すぐにその箇所を直すことが出来た。
だから、こんな短期間で剣の扱い方を習得できた。

「リアル、いくら問題ないからって油断するなよ？まだ今日が残ってる。多分今日、お前の命を狙っている者が現れる」

「分かってるって！・・・・ん？」
「どうした、リアル？」
「いや、あの木の下に女の子が・・・」
「女の子？・・・女の子なんていないぞ？」
「え、嘘！いるはず・・・アレ？いない・・・。本当にいたのに・・・」
「きっと、稽古で疲れてるんだ。あんまり無理するなよ？掃除が終わったら食事にでもしよう」
「・・・うん。そうだね」
俺が答えると、ケイリは宿の中へと入っていった。
「変だな・・・、確かに・・・・・・」
――確かに庭の隅の木の下にいたはずなのに・・・。
髪の毛が腰の辺りまであって、赤い服を着た女の子が・・・・。
「まるで、俺を呼んでるみたいだった・・・」
俺はまたその木の下を見てみたが、やはり女の子の姿はなかった。
「ん～、やっぱり疲れてんのかなぁ。もう終わろう」
そして、俺は宿の中へと入った。
――――――――――――――――――――
リアルが中に入った直後、木の下には赤い服の女の子が立ってい

た。

『クスクスッ、もう少し。もう少しであなたを楽にしてあげる。クスクスクスッ、ね？ガノファ？』

『そうだな』

ガノファと呼ばれる男の声が言った後、女の子は風のようにフッ・・・と消えた・・・・。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６＊謎の少女（後書き）

中間地点です！！

次話からやっと展開していきます！

Ｅｐｉｓｏｄｅ７＊ティモシー《前編》

「リアル、おはよう。庭の掃除手伝ってくれてありがとね。助かったわ」

庭の掃除を終えて中に入ると、俺はフィンと会った。

「おはようフィン。だって泊めてもらってるからね、こんなの朝飯前だよ」

「ふふっ、もう朝ご飯できてるから行きましょう！今日は兄さんとケイリが作ってくれたの」

「え、シヴィルとケイリって料理できるの！？てかシヴィルが料理！？」

「ええ、悔しいけど、あたしより上手いわ・・・ってさりげにリアル酷いこと言ってるって気づいてる？」

フィンは苦笑しながら言った。

意外だ。シヴィルとケイリが料理できるなんて。まぁ、ケイリはできそうだけど、シヴィルは結構出来なさそうなのに・・・と俺は密かに失礼なことを思っていた。

俺なんか、釣った魚を焼くことしかのに・・・。

「さぁ、早くご飯にしましょう！」

「うん！」

俺は腹が減っていたので、返事をしてフィンの後をついて行った。そして着いたのは、多分食堂のようなところだ。広いし、椅子と机

がいっぱいあるし。

「リアル、待ちくたびれたぞ！」
「さぁ、早くこっちに来てご飯にしよう」
「わぁ！これ、全部２人が作ったの！？」
「当たり前だろ？他に誰が作るんだよ」
「たくさん作ったから、どんどん食べていいぞ」
「てか本当にシヴィルも作ったの！？」
「お前失礼だぞ！！」

俺は眼前にあるご馳走を見て驚いた。これを２人が作ったなんて思えなかった。サーモンの蒸しバター焼き、チキンにマッシュポテト、サラダに鯛のお造り、他にもたくさんある。俺達だけで食べられるか分からないくらいだ。

――でも美味しそう・・・・・

「俺にも食べさせてくれ！」
「まりもっ！？」

まりもに食べさせるくらいなら、俺が腹を壊してでも食べる！！ってまりもが今チキンを食べようとしてる！

「まりもは食うなぁーーーーーっ！！」
「かぱぴょーーーーっ！！」

俺は阻止するために、まりもを空へとぶっ飛ばした。

――つーか、『かぱぴょー』って何だよ！何語！？まりも語！？まりもって訳分かんないや。

まぁ、まりももいなくなった所で・・・、

「いっただっきまぁーす！！」

俺は勢いよく食べ始めた。だってお腹空いてたんだもん！

そして俺が食べ始めた時、ケイリが話しかけてきた。

「リアル、この後この村をいろいろと回ってみるか？今日はこの後何も用事は入ってないから、俺が案内してやるぞ？」

「ホントに！？行く行く！！」

俺は急いでご飯をかきこんだ。その様子を見て、ケイリが可笑しそうに笑う。

「リアル、別に急がなくても待っててやるから。ゆっくり食べろ」

「だって、早く回りたいんだもん！！」

そしてご飯を全部食べ終えた後、俺はケイリと一緒に村を回るために宿を出た。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７＊ティモシー《前編》（後書き）

まりもは突然現れます（笑）

Ｅｐｉｓｏｄｅ７＊ティモシー《後編》

「やっぱりこの村は綺麗だな」

俺が宿を出て思ったことは、やっぱり綺麗だということだった。

「そうだな。この村は水が綺麗なことで結構有名なんだ。この村の水は直接地下から引いているものだから、すごく冷たくて綺麗なんだ」

「へぇ～、そうなんだぁ」

ケイリは他にも、ルーフィンド村の有名なところやいいところを沢山話してくれた。

そして、ある角を曲がった時――――。

――――ドンッッ！！

「きゃっ！」

「うわっ！！」

俺は１０歳くらいの女の子にぶつかってしまった。

「ご・・ごめん！大丈夫？」

「いたたっ・・・、うん。大丈夫だよ！ありがとうお兄ちゃん！」

お兄ちゃんかぁ・・・。いい響きだなぁ。俺年下にしか見られないから・・。

「お兄ちゃんって、旅人？」
「うん？・・うん、そうだよ。なんで分かったんだ？」
「だってお兄ちゃん、この村で初めて見たから！」
「そっかぁ。俺がこの村に来たのは3日くらい前だよ」
「そうだったんだ。あたしの名前はティモシー！お兄ちゃんは？」
「俺はリアル！よろしくな、ティモシー！」
「後ろのお兄ちゃんは、お兄ちゃんのお兄ちゃん？」

ティモシーは、俺の後ろにいたケイリに目を向けた。

「・・・・俺はケイリだ。しかしリアルの兄ではない。俺はこの村の人間だ」
「・・・そっかぁ、よろしくね！リアルお兄ちゃん！ケイリお兄ちゃん！」

ちっちゃい子って可愛いなぁ～。俺も弟とか妹欲しかったなぁ！そんな風に思っていると、ケイリが小声で俺に警告してきた。

「おいリアル。ティモシーには気をつけろ」
「えっ？」
「あいつは・・・・ティモシーは何か危険な感じがする・・・」
「何で？まだ１０歳くらいだよ？」
「それでもだ」

何で？あんな子どもが危険な訳ないじゃないか。ケイリは何を言い出すんだ・・・。

「では、リアル。何故ティモシーはリアルが旅人だと分かったんだ？」
「だって、それは俺のことこの村で見たことがなかったから・・・」

「俺はこの村を知り尽くしている。勿論、村人のことも。しかし、ティモシーを見たのは今日が初めてだ」
「えっ！！それってどういう・・・」
「ねぇ、2人で何話してるの？」
「「っ！？」」
「ねぇ・・」
「い・・いや、何でもないよ！ただお腹が空いたなぁって言ってただけだよ！」
「ふ～ん・・。でもそう言えばあたしも・・・。朝から何も食べてなくってお腹ペコペコ」
「じゃあ、ケイリ。宿に戻ってご飯にしようよ！！ねっ！！」
「・・・・・はぁ。わかった」

ケイリは少々不服そうだったけど、ティモシーの様子見として渋々ながら宿に連れて行くことを許してくれた。

「やったぁ！！ありがとう！！」

ティモシーは嬉しそうに笑っていた。でも、その笑いの裏を俺はまだ知らなかった。

「じゃあ行こう！ケイリ、ティモシー！」

そして俺達は宿へと戻った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７＊ティモシー《後編》（後書き）

ティモシーーーーーー！！！！！

さて、次話から物語が急展開！

Ｅｐｉｓｏｄｅ８＊危機

「シヴィル！フィン！」

俺は昼ご飯食べるため、ケイリと一緒にティモシーを連れて宿へと戻ってきた。

「あら、リアル。ケイリと一緒に村を回ってたんじゃないの？」

「それが回ってる途中でお腹減っちゃってさぁー。それに回ってる時に女の子とぶつかっちゃって。その子、朝から何も食べてないみたいなんだ・・・」

「女の子？」

フィンがそう言うと、ティモシーが俺の後ろからひょこっと出てきた。

「こんにちは！あたしはティモシー！お姉ちゃんとお兄ちゃんは？」

「あたしはフィンよ」

「俺はシヴィル、フィンの兄」

「へぇ～、シヴィルお兄ちゃんとフィンお姉ちゃんは兄妹なんだ！」

「そうよ。そういえばティモシー、あなた朝から何も食べてないって言ってたけど・・・」

「うん・・・。でも、リアルお兄ちゃんとケイリお兄ちゃんがご飯作ってくれるって！」

そしてティモシーは俺の方を向いて、にっこりと笑った。

――って俺、魚を焼くことしか出来ないんだけど・・・。っでも、

ティモシーを落ち込ませたくない！！

そして俺は決心した。

「よ・・・よしっ！俺とケイリで沢山ご馳走を作ってやる！だからティモシーはここで待ってな！」

「うん！」

「じゃあ、行こうぜケイリ！」

「・・・・・・・・」

俺がケイリの方を向くと、ケイリはティモシーの方を感情のない目で見ていた。

「ケ・・・ケイリ・・・・？」

「・・・あぁ。じゃあ、行こうか」

「う・・・うん」

そして俺はケイリの後ろをついて行った。途中ケイリはシヴィルとすれ違った時、何かを言っていた。多分ティモシーのことだろう。

俺は気になったがそのまま台所へと向かった。

リアルとケイリが台所へ向かった後、シヴィルが警戒するように話しかけた。

「ティモシー・・・・・。お前は・・・一体何者だ？」
「えっ？何言ってるの？」
「そうよ兄さん。いきなり何を・・・」
「私はただの村人・・・」
「嘘つくんじゃねぇ。だったら、ケイリがあんなに警戒するはずがねぇ」
「えっ・・？」
「それに・・・・」
「・・・・・・・」
「お前には人の気が感じられねぇんだよ」
「・・・・・・・・」

ティモシーは黙ってシヴィルを見ていた。そしてその後、不気味に笑った。

「クスクスッ。あぁ～ぁ、もうバレちゃった」
「お前が・・・・リアルの生命を狙ってるヤツなのか？」
「クスッ、そうよ。あたしがリアルお兄ちゃんの生命を貰うの」
「何故そんな・・・」
「何故？そんなの、リアルお兄ちゃんが聖剣の主だからに決まってるじゃない」
「なっ！？」
「そ・・そんなのおかしいわよっ！！！」

ティモシーが答えた後、シヴィルは絶句し、そしてフィンが叫んだ。

「何でリアルが聖剣の主だからって生命まで・・・。何でそれだけのために！？そんなのおかしすぎる！ティモシー、あんたは狂ってる！！」
「うるさいっ！！！」

「っ！！」
「うるさいっ！！黙れ黙れ！！これはあたしの使命なんだ！！誰にも邪魔はさせないっ！！」
「使命・・・？」

フィンはそれを聞いて、シヴィルと顔を合わせた。

「・・・ちょっと喋りすぎたね。それ以上は言わないわ。それよりも、聖剣の主の生命を貰う前に１つやることが出来た・・・」
「やること・・・？」
「そう・・・・」

ティモシーは一呼吸置いて叫んだ。

「邪魔なあんたたちを殺るのよっ！！！！！」

ティモシーが叫んだ瞬間フィンとシヴィルは壁へと叩きつけられ、気を失ってしまった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８＊危機（後書き）

あーティモシーが本性をあらわしてしまったですねー。

友人にはティモシー怖いと言われました（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0135e/

Travel of Lial～炎の聖剣

2010年10月21日22時05分発行